

# 漢語的自他兩用動詞的句構類型

王淑琴

政治大學日本語文學系副教授

## 摘要

本稿的目的在於釐清日語中的漢語自他兩用動詞在何種句構中使用。本稿依他動詞的ヲ格名詞(=自動詞的ガ格名詞)是否表(A)「身體的一部分」(B)「自然物」(C)「人工物或組織」(D)「抽象概念」將漢語的自他兩用動詞分成四類，考察各個分類在何種句構中使用。先前的研究多將焦點放在自他兩用動詞的自他性、漢語的内部構造或語意分布，較少提及漢語的自他兩用動詞在何種句構中出現。本稿透過句構層次的考察，釐清了漢語自他兩用動詞的性質及使用狀況，研究成果較易應用於日語教學上。

關鍵詞：漢語，自他兩用動詞，反身句構，無生物主語句構，他動性

受理日期：2016.09.03

通過日期：2016.10.14

# **Types of Construction of the Sino-Japanese verbs with transitive and intransitive usages**

Wang Shuchin

Associate Professor, Department of Japanese language and culture of  
Chengchi University

## **Abstract**

The aim of this paper is to clarify the types of construction of the Sino-Japanese verbs with transitive and intransitive usages. These verbs were broken down by types of the object of the transitive sentence (=the subject of the intransitive sentence), that is (A)part of human body (B)natural object (C)artificial material or organization (D)abstraction, and the constructions of these verb types were observed. The previous studies focused on the transitivity, the word-formation or the distribution of meaning of the Sino-Japanese verbs with transitive and intransitive usages, but there are few studies mention the constructions about. Through the observation of the constructions, the properties and usages of the Sino-Japanese verbs with transitive and intransitive usages are clarified and the results can be applied to Japanese language teaching.

**Keywords:** Sino-Japanese word, verbs with transitive and intransitive usages, reflexive construction, inanimate subject construction, transitivity

# 漢語の自他両用動詞の構文的タイプ

王淑琴

政治大学日本語文学系准教授

## 要旨

本稿の目的は漢語の自他両用動詞がどのような構文で使われるかを明らかにすることである。本稿は他動詞のヲ格名詞（＝自動詞のガ格名詞）が(A)「身体の一部」(B)「自然物」(C)「人工物や組織」(D)「抽象的概念」を表すかによって漢語の自他両用動詞を四つのタイプに分類し、それぞれのタイプがどのような構文で使われるかを考察した。従来の研究は自他両用動詞の自他性、漢語内部の構造や意味分布に焦点を当てるものが多く、漢語の自他両用動詞が文の中でどのように使われるかについての考察が少ない。構文レベルの考察により漢語の自他両用動詞の性質や使用状況が明らかとなり、日本語教育への応用が可能となる。

キーワード：漢語、自他両用動詞、再帰構文、無生物主語構文、他動性

# 漢語の自他両用動詞の構文的タイプ

王淑琴

政治大学日本語文学系 准教授

## 1. はじめに

日本語の漢語動詞の中に次の例が示すように自動詞としても他動詞としても使われるもの、いわゆる「自他両用動詞」がある。

- (1) a. 溶岩が噴出した。  
a'. 火山が溶岩を噴出した。  
b. 基本方針が決定した。  
b'. 小泉内閣が基本方針を決定した。

漢語の自他両用動詞を取り上げるものが多いが、次節で述べるように、それらの研究は自他両用動詞の自他性、漢語内部の構造や意味分布に焦点を当てるものであり、漢語の自他両用動詞が文の中でどのように使われるかについての考察が少ない。本稿の目的は漢語の自他両用動詞がどのような構文で使われるかを明らかにすることである。<sup>1</sup>構文レベルの分析により漢語の自他両用動詞の性質や使用状況が明らかとなり、日本語教育への応用が可能となる。

## 2. 先行研究

漢語の自他両用動詞を取り上げる研究が多く、以下、通時的変化を取り上げる永澤（2007）を除いて、先行研究を「統語レベルの分析」と「語レベルの分析」に分けて取り上げる。

「統語レベルの分析」には、自動詞用法と他動詞用法がどちらが基本かを論じる影山（1996）、金（2004）、小林（2004）、楊（2007）と、「漢語サセル」の使用条件を論じる山田・山田（2009）、山田（2014）がある。漢語の自他両用動詞の先行研究の中に、自動詞用法と他動

---

<sup>1</sup> 和語の自他両用動詞について筆者（2015）の考察があるため、この論文の研究対象を漢語の自他両用動詞に絞った。また、和語の自他両用動詞との違いについて紙幅のため論文に入れることができず別稿に譲りたい。

詞用法がどちらが基本かを論じるものももっとも多い。例えば、影山（1996）は自他両用の漢語動詞が他動詞を基にして自動詞が派生されるとし、その根拠として自動詞用法の方に意味的・認知的制限が観察されることを挙げている。

(2) a . ナポレオンがフランス領土を拡大した。

a' . フランス領土が拡大した。

b . コピー機を使って、図面を拡大した。

b' . \* (コピー機で) 図面が拡大した。 (影山 1996: 203)

これに対し、金（2004）は「回復する」のような他動詞用法に制限が見られるものがあると指摘している（(3)を参照）。このような漢語動詞は、(4)が示すように主語と目的語の間に「再帰的關係（一定の所属關係）」が存在する場合他動詞文は成立するが、そうでない場合には他動詞文が成立しないと述べている。

(3) a . イラクとの国交が回復した。

a' . ヨルダンがイラクとの国交を回復した。

b . 景気が回復した。

b' . \*経済学者が景気を回復した。 (金 2004: 91)

(4) a . イラクとの国交が回復した。

a' . ヨルダンがイラクとの国交を回復した。

b . ヨルダンとイラクの国交が回復した。

b' . \*アメリカがヨルダンとイラクの国交を回復した。

(金 2004: 92-93)

小林（2004）は自他両用の「一化」の造語を取り上げ、「本格化」のような自動詞用法を基本とするものがあると、「実用化」のような他動詞用法を基本とするものがあると指摘している。楊（2007）は「する」形と「させる」形、「する」形と「される」形の対応関係によって、自他両用動詞を「自動詞用法が基本である動詞」、「他動詞用法が基本である動詞」、「自動詞用法と他動詞用法が同等に働く動詞」に分類している。

「漢語サセル」の使用条件を論じるものには山田・山田（2009）、

山田（2014）がある。山田・山田（2009）は自他同形の漢語動詞の中に、例えば、「論文を完成する」「論文を完成させる」のように、「する」の形で他動詞文を形成することができながら、あえて「～させる」という形を用いる場合があると指摘し、「～させる」形の現れる条件を分析している。山田（2014）は、自他同形の漢語動詞の分析を通じて日本語における再帰構文の他動性を検討している。つまり、他動詞寄りの自他同形漢語動詞であっても再帰構文になると、「させる」を使用する傾向が高いという調査結果が得られ、これは、再帰構文の他動性の弱さを証明するものであると結論付けている。

一方、「語レベルの分析」には、漢語動詞の語構成とその自他との間の関係を論じる張志剛（2010、2014）、張善実（2010）と、漢語の自他両用動詞の意味分布を論じる小林（2004）がある。例えば、張志剛（2010）は「A>V」という修飾型の漢語動詞の動詞性要素の自他と漢語動詞全体の自他との関係を次のように指摘している（「動詞性要素」は下線の部分である）。

動詞性要素が自動詞：激怒、高騰、大勝、近接など

→漢語動詞（例えば「激怒する」）が自動詞

動詞性要素が他動詞：軽視、新築、詳述、明記など

→漢語動詞（例えば「軽視する」）が他動詞

動詞性要素自他両用動詞：激滅、大破、高揚、密閉など

→漢語動詞（例えば「大破する」）が自他両用動詞

→漢語動詞（例えば「激滅する」）が自動詞

（張志剛 2010：419-420）

張志剛（2010）は、修飾型漢語動詞の場合、その自他は動詞性要素の自他と一致するが、動詞性要素が自他両用動詞になる場合、漢語動詞が自他両用動詞になるとは限らず、「激滅」のように自動詞になることもあると結論付けている。張善実（2010）は「VNする」型の漢語動詞を取り上げ、「VNする」全体の自他性と「V」の自他性との関わりを論じている。「VNする」における「V」が自他両用の場合、「VNする」は自他両用のものもあれば、自動詞用法、他動詞用法の

ものもあると指摘している。

自他両用の二字漢語動詞の意味分布を調べたものには小林(2004)がある。小林は、国立国語研究所の『分類語彙表』を使い二字の漢語動詞の分布を調べている。その結果、「増減」(1.1580)、「開始・終了」(1.1505)、「出現」(1.1210)、「破壊」(1.1572)、「伸縮」(1.1582)の項目に属するものが多かったということが明らかとなった。

以上では、漢語の自他両用動詞に関する先行研究を「統語レベルの分析」と「語レベルの分析」に分けて取り上げた。「統語レベルの分析」は自動詞と他動詞がどちらが基本かということに関心があり、自他両用動詞には具体的にどのようなものがありどのように使われるかを述べていない。一方、「語レベルの分析」は、漢語動詞の自他とその動詞構成要素の自他との関係や、漢語の自他両用動詞自体の意味分布を明らかにしているが、文の中での使用状況を明らかにしていない。以下で見るように、本稿は漢語の自他両用動詞をその他動詞文のヲ格名詞(=自動詞文のガ格名詞)により類型化し、それぞれの類型がどのような構文で使われるかを考察する。本稿の考察により漢語の自他両用動詞の類型と文の中での使用状況が明らかとなる。

### 3. 研究対象と資料収集

#### 3.1 研究対象

森田(2000)は「自他両用動詞」と「自他同形動詞」を区別しており、「同じ語形が意味面で自他間に共通性を持ち、文法面でも格に立つ名詞語彙に異動がない場合を指す」(p.63)ものを「自他両用動詞」と呼び、同じ語形を取って別々に機能しているものを「自他同形動詞」と定義している。例えば、(5)の「増す」は「自他両用動詞」であるが、(6)の「負う」は他動詞のヲ格名詞が自動詞のガ格名詞とは違い「自他同形動詞」である。

(5) a. (川が) 水かさを増す。

b. (川の) 水かさが増す。 (森田 2000: 69)

(6) a. 責任を負う。(cf.\*責任が負う)

b. 世人の努力に負う。 (森田 2000: 66)

「自他同形動詞」は厳密に言うと自他対応の条件を満たしていないので、本稿は「自他両用動詞」のみ研究対象とする。佐藤 (2005) は動詞の自他対応は意味、形態、統語の三つの条件をすべて満たさなければならないとしている。例えば、(B) の「折れる」と「折る」は (A) の条件をすべて満たしたものである。

(A) 自他対応の定義

- a. 意味的条件: 自動詞文と他動詞文が同一の事態の側面を叙述しているとして解釈可能である。
- b. 形態的条件: 自動詞と他動詞が同一の語根を共有している。
- c. 統語的条件: 自動詞文のガ格と他動詞文のヲ格が同一の名詞句で対応している。

(B) a. 鉛筆が 折れる。

b. 太郎が 鉛筆を 折る。 (佐藤 2000: 170)

本稿では (b) の条件を (b') 「自動詞と他動詞が同一の音形を共有している」にする。この定義に従うと、「自他同形動詞」は (a) (c) の条件を満たさないことが分かる。例えば、(7) の「中断する」は「自他両用動詞」であり研究対象とするが、(8) の「減量する」は「自他同形動詞」であり研究対象としない。

(7) a. 業者が 工事を 中断した。

b. 工事が 中断した。

(8) a. 市役所が ごみを 減量した。

b. \*ごみが 減量した。(cf. 人が 減量した。<sup>2</sup>)

### 3.2 用例の収集

本稿はまず『国立国語研究所資料集 7 動詞・形容詞問題語用例集』(国立国語研究所、1971、秀英出版) の「辞典によってゆれているものの表」(pp. 164-187) から調査対象の 12 冊の辞書のうち二つ以

---

<sup>2</sup> 次の例を参照。

(i) 胆石のある人が減量するときには、あまりあせらずに体重を落とすようにしましょう。 (BCCWJ)



上の辞書に「両」（つまり、自他両用）と記された漢語動詞を抽出した。また、2 節で述べた先行研究でリストされた自他両用動詞を収集し、上記との重複を取り除いた。

このように抽出された自他両用動詞が実際にどのように使われるかをさらに BCCWJ（「現代日本語書き言葉均衡コーパス」）における用例で確認し、上記の自他両用動詞の定義 (a) (b') (c) を満たしたもののみ研究対象とする。<sup>3</sup>自他両用動詞として使われるかという判断はすべて BCCWJ における用例に依拠する。<sup>4</sup>このように「自他両用動詞」と認定されたのは以下の 95 語の漢語動詞である。

中和、中断、分散、分解、出店、半減、失墜、生成、休館、全焼、回転、回復、妥結、完了、完成、完備、決定、実現、拡大、変更、流入、流出、発生、発症、倍加、倍增、展開、紛失、逆転、高揚、停止、移転、終了、閉会、喪失、廃業、減少、短縮、超過、開会、開局、開店、開校、開港、開業、開演、開館、集中、解決、解消、解散、増加、増進、撤退、噴出、緩和、縮小、閉鎖、復活、骨折、軽減、固定、加速、一変、普及、発展、汚染、撲滅、焼失、改善、低減、運行、運航、断絶、継続、統合、統一、蓄積、稼働、持続、集結、損傷、結合、損壊、連発、破損、終結、交差、反射、欠損、還流、移行、優先、充実、成就

「辞典によってゆれているものの表」において二つ以上の辞書に「両」と記された漢語動詞を 247 語抽出したが、その多くは自他両用動詞ではない。これは楊（2009）でも指摘したように、国語辞典で「自他サ変」と記された漢語動詞は「非能格構文 vs. 対格構文」タイプも含まれるからである。楊（2009）は本稿の定義を満たした自他両用動詞を「非対格構文 vs. 対格構文」タイプと呼び、国語辞典

<sup>3</sup> 中納言アプリケーションを使い、「共起検索」で用例を検索した。つまり、「キー」で【語彙素検索】を選択し漢語名詞を入れ、「後方共起」で【活用型】の【大分類】の【サ行変格】を選択する。自他両用の用法があるかを確認する場合、NLB（NINJAL-LWP for BCCWJ: <http://nlb.ninjal.ac.jp/>）を利用した場合もある。

<sup>4</sup> 例えば、次の漢語動詞はその自動詞用法、或いは他動詞用法が BCCWJ にはないがウェブでは用例が見つかる。しかし、ここでは基準を統一するため、これらの漢語動詞を研究対象としない。

(i) 休刊、汚損、軟化、漸増、鎮火

において自他両用動詞として認定された漢語動詞の中に「非能格構文 vs. 対格構文」タイプが多数見られると指摘している。

(9) a. 会議が中断する。

b. 部長が会議を中断する。 【非対格構文 vs. 対格構文】

(10) a. アメリカが譲歩する。

b. アメリカが主張を譲歩する。

c. \*主張が譲歩する。 【非能格構文 vs. 対格構文】

(楊 2009: 81)

上記の先行研究は「自他両用動詞」と「自他同形動詞」を区別せず、自他用法を併せ持つ漢語動詞をすべて「自他同形動詞」と呼んでいる。しかし、前節で見たように、「自他同形動詞」は厳密に言う自他対応の定義を満たしたものとは言えない。本稿は先行研究と比べて収集した語数が少ない（例えば、小林 2004 は自他両用の二字漢語動詞を 346 語採取した）のも、本稿が厳密な自他対応の定義を取ったことと関連している。

#### 4. 自他両用の漢語動詞の類型

3 節で述べたように、本稿は自他動詞の構文的な対応から自他両用動詞を定義する。その定義に基づくと他動詞のヲ格名詞が自動詞のガ格名詞と同じであるが、本稿はその名詞の種類によって自他両用動詞を類型化する。今回収集した用例の対応する名詞を次の四つのタイプに分類できる。この四つのタイプに分類するのは、それらの名詞の種類が構文の違いを反映しているからである。

A: 対応する名詞が【身体の一部】の場合

体（を／が）回転する<sup>5</sup>

B: 対応する名詞が【自然物】の場合

有機物（を／が）分解する<sup>6</sup>

<sup>5</sup> 次の例を参照。

(i) 右足の指先を軸にして、両足で小さくとぶようにして体を右に回転する。

(ii) ああ、きみの体が回転しているよ。

<sup>6</sup> 次の例を参照。

(i) 有機物を二酸化炭素や水と、そのほかの無機物に分解する生物を、分解

C：対応する名詞が【人工物や組織】の場合

建物（を／が）全焼する<sup>7</sup>

D：対応する名詞が【抽象的概念】の場合

関係（を／が）改善する<sup>8</sup>

対応する名詞が複数ある場合（例えば、「意識（を／が）回復する」「景気（を／が）回復する」）、多義語として扱い両方のタイプに入れる。なお、本稿で取り上げた実例は出典が明記されないものはすべて BCCWJ からとったものである。以下、それぞれの名詞のタイプとそれが対応する構文を述べる。

#### 4.1 対応する名詞が【身体の一部】の場合

他動詞のヲ格名詞（＝自動詞のガ格名詞）が【身体の一部】を表す自他両用の漢語動詞には次のものがある。ここでは、「意識」や「恐怖」など心理的なものも含まれる。また、病名（～症、エイズ）は人間がかかる病気なのでこの種類に分類する。

体（を／が）回転する、手／足（を／が）交差する、～骨（を／が）損傷する<sup>9</sup>、腕／骨／足（を／が）骨折する、意識／視力／体力（を／が）回復する、恐怖（を／が）倍加する<sup>10</sup>、食欲（を／

---

者という。

(ii) これは、燃やすことによって紙やプラスチックなどの有機物が二酸化炭素や水などに分解して、かさを大きく減らすことができるからである。

<sup>7</sup>次の例を参照。

(i) 衣料、洋品などを販売する『守井洋品店』の二階住居部分から出火、木造モルタル二階建の同建物を全焼した。

(ii) 鉄格子と土壁の無骨な建物が全焼したのは、夏の終わりだった。

<sup>8</sup>次の例を参照。

(i) ドイツはこの夏にもキール運河が完成する予定で、さらにバルカン諸国との関係を改善していた。

(ii) 「もし夫婦関係が改善しなければ、別の女性と付き合うよ」

<sup>9</sup>「損傷する」は自他両用動詞として使われることが少なく、「～骨（を／が）損傷する」はそれぞれ次の1例のみである。

(i) 以前、頭蓋骨と鎖骨を損傷しています。

(ii) ひかれたおばあさんは右足大腿骨が損傷してしまいました。

<sup>10</sup>「恐怖（を／が）倍加する」はそれぞれ次の1例のみである。

(i) 逃亡者の心理が海の恐怖を倍加する。

(ii) 私たちは人生に恐怖をいだが、それは、現実のあるレベルにおいて、あるいは何らかの方法によって、自分がその原因になっているか、自分がそこにいることによって恐怖が倍加しているなどとは思えないからだ。

が) 増進する、神経／気持ち／意識 (を／が) 集中する、症状／痛み (を／が) 緩和する、症状／痛み／緊張 (を／が) 軽減する、症状 (を／が) 改善する、疲労／脂肪 (を／が) 蓄積する、～症／～炎／～病 (を／が) 発症する、エイズ (を／が) 撲滅する<sup>11</sup>

このタイプの漢語動詞の他動詞用法について、ヲ格名詞が身体の一部を表すので他動詞として使われる場合、次の例が示すように再帰構文で使われる。(11)はヲ格名詞「体」が身体の一部を表し、再帰構文である。<sup>12</sup>

(11) 右足の指先を軸にして、両足で小さくとぶようにして体を右に回転する。

再帰構文が多いが、次の例が示すように無生物主語の構文で使われるものも見られる。

(12) 容保の体に恐怖が走った。(中略) 逃亡者の心理が海の恐怖を倍加する。

(13) 赤と黄色は食欲を増進する色で、興奮色です。

再帰構文も無生物主語構文も非典型的な他動詞文である。再帰構文について、仁田(1982)、高橋(1985)、村木(1986)が指摘しているように、他者への働きかけがないため、次の例が示すようにまとも受動が対応せず自動詞文に近いという性質がある。

(14) a. 太郎ハ紺の背広ヲ着ていた。

b. \*紺の背広ハ太郎ニ着られていた。 (仁田 1982: 83)

無生物主語構文も非典型的な他動詞文である。井上(1994)は「意

<sup>11</sup> 「撲滅する」自体は用例が少なく、「エイズ (を／が) 撲滅する」もそれぞれ次の1例のみである。

(i) 私どもは今後、水野先生がおっしゃったように、とにかくできるだけ国民に理解を求め、そうすることによってエイズを撲滅していく、こういうことでなければならぬ。

(ii) ストックホルムのエイズの会の一番最後にWHOの総長のマラーは、一つの国でエイズが撲滅したからといって自己満足してはいけない、(略)。

<sup>12</sup> 「再帰」とは「動作主から出た働きかけが結局は動作主自身に戻って来ることによって、動作が完結する」現象と定義されている(仁田 1982: 80)。ヲ格名詞が病名の場合、一種の拡張された再帰構文と見なせる。

(i) H・Oさん 九十四歳 (中略) 八十二歳で肺炎を発症し入院。

図的動作」と「被動者の変化」という意味特徴を典型的な他動詞文（「動作主他動詞文」）が持つ特徴とし、その二つの特徴のうちの一つしか持っていない、或いは、両方の特徴を欠落したものを典型的な他動詞文からはずれるものと扱っている。井上（1994）の他動詞文に対する分類を次のようにまとめる。

A：動作主他動詞文

B：無意志主語他動詞文（有生主語を持ちながら非意図的動作を表すもの）

例：明は運転免許証をなくした。

C：物理力他動詞文（自然現象など物理的な力を表す名詞句を主語とするもの）

例：津波が海浜の部落を襲った。

D：原因他動詞文（原因の名詞句を主語とするもの）

例：過度の野心が彼の寿命を縮めた。

E：道具他動詞文（道具を表す名詞句を主語とするもの）

例：白い布が机を覆っていた。

F：不変化他動詞文

例：加藤さんが窓ガラスを拭いた。

G：中立他動詞文

例：私は30分もバスを待った。

H：経験者他動詞文

例：国民は選挙法の改正を喜んでいる。

I：優位関係他動詞文<sup>13</sup>

例：この連中は常識を欠いている。

（井上 1995：112-114）

---

<sup>13</sup> 主語が全体を表し、補語が部分を表し、または部分が集まって全体をなすというように、主語が補語に対して支配的な位置にあるという意味関係を表す文である。例えば、次のような文が含まれるとしている。

- (i) a. この連中は常識を欠いている。  
b. 今回の提案はいくつかの問題を含んでいる。  
c. 林の中に点在する20数軒の農家が一つの集落をなしている。  
d. このデータが新しい問題を示唆している。

それらの他動詞文と、典型的な他動詞文が持つ「意図的動作」と「被動者の変化」という意味特徴との間の関係は次のようである。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
構文の種類	:(動)	(無意)	(物)	(原)	(具)	(不変)	(中)	(経)	(優)
意図的動作	+	-	-	-	-	+	+	-	-
被動者の変化	+	+	+	+	+	-	-	-	-

(井上 1995: 114)

井上(1994)の分類では、「C:物理力他動詞文」「D:原因他動詞文」「E:道具他動詞文」は無生物主語であり、それらの他動詞文は「被動者の変化」を起こしたものの、(動作主の)「意図的動作」ではないため、非典型的な他動詞文である。上記の(12)の例は、ガ格名詞「逃亡者の心理」が海の恐怖を強める原因であり「原因他動詞文」と見なせる。(13)の例は「赤と黄色」が食欲を増やすことがある種の自然現象と見られ、「物理力他動詞文」と見なせる。このように、無生物主語構文は、(動作主の)「意図的動作」を欠けた非典型的な他動詞文であることが分かる。

無生物主語構文について、西村(1998: 137-140)は自らの力ないしエネルギーを用いて活動し、そのような活動が他の存在に影響を与えうる主体という捉え方であろうから、自然現象のこの把握の仕方は「擬人化(personification)」の一種であると指摘している。つまり、無生物主語構文は、擬人化の働きによって「動作主他動詞文」から拡張された構文と言える。

このように、他動詞のヲ格名詞(=自動詞のガ格名詞)が【身体の一部】を表す自他両用の漢語動詞の場合、「再帰構文」か「無生物主語構文」という非典型的な他動詞文で使われることが分かる。

一方、このタイプの漢語動詞の自動詞用法は、次の例が示すように、再帰用法から派生されたものである。(15)(16)はそれぞれ「(あなたの)意識が集中する」「(私の)症状が軽減しました」の意味であり、再帰用法から派生された自動詞用法であると考えられる。

(15) ペイン・クリニックにもかかっているのですが、効果が無い

のです。20年前に緑内障をおこし目が見えないので、余計痛みに対して意識が集中するのでは？とも言われました。

(16) ホルモン補充療法によって症状が軽減しました。

以上の説明をまとめると、他動詞のヲ格名詞（＝自動詞のガ格名詞）が【身体の一部】を表す自他両用の漢語動詞は、「再帰構文」か「無生物主語構文」という非典型的な他動詞文で使われる。また、その自動詞用法は身体の一部（「意識」「恐怖」など心理的なものや病名も含まれる）が主語になり再帰用法の自動詞化した用法であると考えられる。

#### 4.2 対応する名詞が【自然物】の場合

他動詞のヲ格名詞（＝自動詞のガ格名詞）が【自然物】を表す自他両用の漢語動詞には次のものがある。ここでは、「電荷」や「アノミ酸」など人為的に作り出された物理用語もこの種類に入れる。

電荷（を／が）中和する<sup>14</sup>、有機物／微生物（を／が）分解する物質（を／が）生成する<sup>15</sup>、土砂（を／が）流出する<sup>16</sup>、ガス／酸素／マイナスイオン（を／が）発生する、煙／溶岩（を／が）噴出する、水／土壌（を／が）汚染する<sup>17</sup>、アミノ酸（を／が）結合する、光／太陽光（を／が）反射する、遺伝子／細胞（を／が）欠損する

<sup>14</sup>「電荷（を／が）中和する」は用例が少なく、それぞれ次の1例のみである。

(i) 食塩は、たんぱく質の負電荷を中和し、凝集性を高める。

(ii) 雷は、夏季雷の場合一般に雲の中心と大地の電位が約1億Vで放電し、雷雲中のマイナス電荷と大地に誘導されたプラス電荷が中和する現象である。

<sup>15</sup>自動詞用法（「物質が生成する」）は次の1例のみである。

(i) 高エネルギーレベルでは物質が生成したり消滅したりするのである。

<sup>16</sup>「土砂（を／が）流出する」は用例が少なく、それぞれ次の1例のみである。

(i) 斐伊川上流部の中国産地に位置する仁多郡や飯石郡に属しているところでは、たたら製鉄が盛んでしたから、砂鉄採取の為の鉄穴流しによって、下流へ大旦里の土砂を流出し、(略)。

(ii) そしてここから大量の土砂が流出し瀬田川の河積を狭めていた。

<sup>17</sup>自動詞用法「水／土壌が汚染する」はそれぞれ次の1例のみである。「汚染する」は他動詞寄りの自他両用動詞と考えられる。

(i) そして、その地域における地下水がどの程度汚染しているかというのを、現状、この法案においても、日常的にチェックするわけではございません。

(ii) いま一つ、その土壌が汚染している危険性の高いものとして、いわゆる埋立地というのがございます。

このタイプの漢語動詞の他動詞用法について、4-1節で見た「無生物主語構文」の一種である「物理力他動詞文」で使われる。(17)の「洗剤が有害なガスを発生する」、(18)の「微生物が有機物を分解する」は自然に起きる現象であり、「物理力他動詞文」の一種と言える。

(17) 清掃のときに洗剤を使う場合には、排水をよごしたり、使用方法を誤ると人体に有害なガスを発生したりすることもあります。

(18) 微生物が有機物を分解しながらゆっくりと栄養分の育まれる土が求められるのです。

他動詞用法は自然現象を表し「物理力他動詞文」と言えるが、その用例の中に再帰的用法を持つものもある。例えば、(19)は「火山が溶岩を噴出する」の意味であり、ヲ格名詞「溶岩」がガ格名詞「三宅島」の一部である。(19)のような例は「物理力他動詞文」とすると同時に、一種の拡張された再帰構文とも言える。

(19) 初めに、今回の三宅島の噴火についてお伺いしておきたいと思います。(中略)この噴火は、前回昭和三十七年の噴火と同じくいわゆる割れ自噴火でございまして、短時間に大量の溶岩を噴出するのが特徴でございます。

このタイプの漢語動詞の自動詞用法について、もともと自然に起きる現象を表すため自動詞用法が一般的である。自動詞文で使われる場合、(20)の「ガスが発生する」、(21)の「大量の土砂が流出する」のように、文全体が自然現象を表す。

(20) バッテリーからはガスが発生するので、車内には積めません。

(21) 大戸川は花崗岩の真砂よりなり、近代になって砂防工事を行うまで広くはげ山となっていた。そしてここから大量の土砂が流出し瀬田川の河積を狭めていた。

以上の説明をまとめると、他動詞のヲ格名詞(=自動詞のガ格名詞)が【自然物】を表す自他両用の漢語動詞は、「無生物主語構文」の一種である「物理力他動詞文」で使われる。4.1節で見たように、



「物理力他動詞文」は（動作主の）「意図的動作」という特徴を欠いているため、非典型的な他動詞文である。また、(19)の例が示すように、それらの他動詞文の中に再帰的な用法を持つものもある。一方、その自動詞用法は文全体が自然現象を表す。

#### 4.3 対応する名詞が【人工物や組織】の場合

他動詞のヲ格名詞（＝自動詞のガ格名詞）が【人工物や組織】を表す自他両用の漢語動詞には次のものがある。

荷物（を／が）紛失する、エアコン（を／が）稼働する<sup>18</sup>、セル／コンピューター（を／が）結合する、物（を／が）損壊する<sup>19</sup>、データ／パソコン（を／が）破損する、／～店（を／が）出店する、図書館（を／が）休館する、建物（を／が）全焼する、建物（を／が）焼失する、～屋／～店（を／が）廃業する、議会（を／が）開会する、～会（を／が）閉会する、テレビ局／放送局（を／が）開局する<sup>20</sup>、～店／レストラン（を／が）開店する、～学校（を／が）開校する、横浜（港）（を／が）開港する、旅館／工場（を／が）開業する、ミュージカル（を／が）開演する<sup>21</sup>、博

<sup>18</sup> 「エアコン（を／が）稼働する」はともに用例が少なく、それぞれ次の1例のみである。

- (i) 九月とはいっても、まだ暑い。八月よりはましだけど、夜でもエアコンを稼働している。
- (ii) 俺は仕方なしに立ち上がり、リモコンの運転ボタンを押す。すると、ピッと電子音がしてエアコンが稼働し始めた。

<sup>19</sup> 「物（を／が）損壊する」は法律用語である。

- (i) 第二百六十一条 前三条に規定するもののほか、他人の物を損壊し、又は傷害した者は、三年以下の懲役又は三十万円以下の罰金若しくは科料に処する。
- (ii) したがって道路以外の場所で車両等の走行により人が死傷し、物が損壊しても、交通事故とはならない。

<sup>20</sup> 「放送局を開局する」という他動詞用法の用例はないが、「放送局が開局される」という他動詞用法の受身形の用例は次の1例ある。

- (i) 民間放送事業者による文字放送は六十三年十二月に北海道地方、東北地方、中国地方、四国地方、九州地方及び沖縄地方に放送局が開局されたことにより、民間放送においても全国どこでも文字放送が受信可能となっている。

<sup>21</sup> 「ミュージカルを開演する」という他動詞用法の用例はないが、「ミュージカルが開演される」という他動詞用法の受身形の用例は次の1例ある。

- (i) 十一月十六日（日）午後2時から、市民会館でミュージカル「シンドバットの冒険」（劇団ポプラ、2幕十四場九十分休憩含む）が開演（さ）れます。

物館（を／が）開館する、衆議院／会社（を／が）解散する、～店（を／が）撤退する、工場／会社（を／が）閉鎖する<sup>22</sup>、バス／列車（を／が）運行する、船／フェリー（を／が）運航する、両（二つの）法人（を／が）統合する、ドイツ／スペイン（を／が）統一する

このタイプの漢語動詞の他動詞用法について、ヲ格名詞が人工物や組織なので、ガ格名詞がヲ格名詞に働きかける動作主となり文全体が「動作主他動詞文」になる。例えば、(22)はガ格名詞「私」がヲ格名詞「焼肉店」に働きかける動作主であり、「動作主他動詞文」である。また、(23)は動作主が「ソニー」という組織であるが、ヲ格名詞「工場」に対する働きかけがあり「動作主他動詞文」である。

(22)最近、わたしは焼肉店を開店しました。

(23)すでに、ソニーは、米ペンシルベニア州ピッツバーグにある液晶テレビ工場を閉鎖し、米国での現地生産から撤退することを決めた。

これらの動作主他動詞文は、その多くが(19)の例で見たように、「再帰的」という特徴を持っている。例えば、(22)はヲ格名詞「焼肉店」がガ格名詞「私」の所有物であり、(23)はヲ格名詞「工場」がガ格名詞「ソニー」の所有物であり、「再帰的」という特徴を持っている。

このタイプの漢語動詞の自動詞用法について、人工物や組織のような無情物が主語に来る用法（例えば、「ラーメン店が開店した」）は一般的ではなく、特殊な条件が必要であると考えられる。王(2014)は自他両用動詞「開く」「閉じる」の自動詞文の主語に人工物を表す名詞が来る場合、他動性が低い文脈が必要であるとし具体的に以下の条件を指摘している。

①「テイル」形で使われ、状態の意味を表す場合

---

<sup>22</sup>「工場が閉鎖する」は次の1例のみであり、「閉鎖する」は他動詞寄りの自他両用動詞である。

(i) だが一九八〇年にダッジ社の中心工場が閉鎖すると、状況は一変した。

②「自然に～という結果状態になる」という文脈的意味がある場合

③連体修飾節内にあり背景化された出来事で使われる場合

④動作主が不明、或いは動作主の意志を避ける場合

以下、これらの他動性の低い文脈的条件のもとで、このタイプの漢語動詞の自動詞用法が現れることを見る。(24)は何軒かのコンビニエンスストアがあちこちにあるという意味を表し、「開店している」は動作性がなく「店が営業している」という状態を表す。

(24)セブンイレブンとか、ファミリーマートだとか、そのほかコンビニエンスストアといわれる店が何軒もあちこちで開店している。

「テイル」形と動作主との関係について、杉本(1995)は変化動詞文において動作主が存在しない場合、結果相解釈が許されると指摘している。杉本は、次の例を挙げ、結果相の「テイル」形は文を「脱動作主化」するとも言えるものであるとしている。無情物が主語になる(25b)は非文であるが、(26)が示すように(25b)の文を「テイル」形にすると自然になる。

(25) a. 子供が枝にぶらさがった。

b. \*カバンが枝にぶらさがった。 (杉本 1995: 48)

(26) カバンが枝にぶらさがっている。 (ibid.)

この現象について、杉本は「テイル」形が結果相解釈を受けるために脱動作主化され、「カバン」のような無生物主語を許すようになるのではないかと指摘している。つまり、「テイル」形で動作性がなくなり、無生物主語を取る自動詞用法が可能になるのである。(24)の例も同様に、「テイル」形は状態を表すため、その動作主性がなくなり無生物主語を取る自動詞用法が可能になると考えられる。

②の条件について、「自然に～という結果状態になる」という文脈的な意味がある場合自動詞用法が現れる。そのような文脈の多くは、条件節(～と、～ば)や手段、原因を表す節に導かれ、「その状況のもとで／その手段によって／それが原因で、ある結果状態が生じる」という意味を表す。例えば、(27)は「リモコンの運転ボタン

を押す」という動作によって「エアコンが稼働する」という事態が  
起こり、その動作がエアコンが稼働する「手段」と言える。(28)は  
「道路以外の場所で車両等の走行」により「物が損壊する」という  
事態が起こり、その動作が物が損壊する「原因」を表す。(27)(28)  
は事態を引き起こす動作主がいるが、文の焦点が「エアコンが稼働  
する」「物が損壊する」という結果状態にあるため、自動詞用法が使  
われる。<sup>23</sup>

(27) 俺は仕方なしに立ち上がり、リモコンの運転ボタンを押す。

すると、ピッと音電子音がしてエアコンが稼働し始めた。

(28) したがって道路以外の場所で車両等の走行により人が死傷し、  
物が損壊しても、交通事故とはならない。

③の条件「連体修飾節内にあり背景化された出来事で使われる場  
合」について、例えば、次の例では「ご当地ラーメン店が出店する」  
「会社が解散する」という自動詞で表される事態が連体修飾節内に  
現れる。(29)ではラーメン店を出店する動作主が当然存在するが、  
ここでは焦点が「テーマパーク」という場所にあるため、「ラーメン  
店を出店する」という事態が背景化され自動詞用法が使われると考  
えられる。(30)も同じように、会社を解散する動作主が存在するが、  
文の焦点が後ろの「裁判所の厳格な監督が開始される」という事態  
にあるため、「会社を解散する」という事態が背景化され、自動詞用  
法が使われると考えられる。

(29) (問) 京都で美味しくて有名なラーメン屋さんを教えて下さ  
い。もしそんなサイトがあればアドレスも教えて下さい。

(答) J R 京都伊勢丹内。函館から熊本までのご当地ラ  
ーメン店が出店するテーマパーク。京都ラーメンの魅力をたっぷ  
りとお堪能下さい。

(30) このように会社が解散し、清算している段階で、裁判所の厳  
格な監督が開始され、以後、しっかりとした手続で清算を行

---

<sup>23</sup> BCCWJ の用例の中に条件節（～と、～ば）を伴うこのタイプの漢語動詞の  
用例がなかった。

う制度のことを特別清算といいます。

高橋（1985）は③の条件に関連する言語現象を指摘している。高橋は連体修飾節の中の動作性が「状態性」や「性質性」に変わることがあると指摘している。例えば、(31)の連体修飾節は変化の結果状態を表し、能動一受動の対立の、実質的なヴォイス的意味を失ったと述べている。また、(32)の連体修飾節はこのほうちょうを他から区別する特徴的性質を表すもので、動作レベルでのヴォイス関係には無関心であるとし、つまり、形式的には能動動詞であっても、実質的にはヴォイスから解放されていると述べている。

(31) a. 天じょうからつるした電灯

b. 天じょうからつるされた電灯 (高橋 1985: 17)

(32) a. 冷凍肉をきるほうちょう (一デ)

b. 冷凍肉をきるのにつかうほうちょう (一ヲ)

c. ギザギザのついたほうちょう (一二)

d. ギザギザになったほうちょう (一ガ)

e. 刃にギザギザをつけたほうちょう (一ク)

(高橋 1985: 17-18)

上記の(29)(30)も同じように、連体修飾節内の「ご当地ラーメン店が出店する」は「テーマパーク」の特徴を表し、「会社が解散する」は会社が今どういう段階にあるかという会社の状態を表すもので、動作性を失い自動詞用法が使われるのであると考えられる。

最後に、④「動作主が不明、或いは動作主の意志を避ける場合」の条件を見る。例えば、(33)は「アヘン店を開く」動作主が存在すると考えられるが、ここでは動作主が不明であるため自動詞用法が使われる。また、(34)は話し手が勤めていた会社を閉鎖した動作主を当然知っているが、ここではその動作主をわざわざ示す必要がないため、自動詞用法が使われると考えられる。

(33) 日本軍によるハルビン占領以来五〇〇軒以上のアヘン店がキタスキー街および大正街地帯に開店した。

(34) 勤めていた会社が閉鎖して事務服を貰いました…

以上では、①～④という他動性の低い文脈的条件のもとで、このタイプの自他両用動詞の自動詞用法が現れることを見た。

4.3 節の説明をまとめると、他動詞のヲ格名詞（＝自動詞のガ格名詞）が【人工物や組織】を表す自他両用の漢語動詞は、その他動詞用法が「動作主他動詞文」で現れ、また、その多くが「再帰的」という特徴を持っている。一方、その自動詞用法は上記の①～④の他動性の低い文脈的条件のもとで現れる。

#### 4.4 対応する名詞が【抽象的概念】の場合

他動詞のヲ格名詞（＝自動詞のガ格名詞）が【抽象的概念】を表す自他両用の漢語動詞は、数が最も多く次のものがある。<sup>24</sup>

工事／試合（を／が）中断する、機能（を／が）分散する、権威／信頼（を／が）失墜する、景気／関係（を／が）回復する、交渉（を／が）妥結する、準備／工事／手続き（を／が）完了する、施設／制度（を／が）完備する、施設／工事／スタイル（を／が）完成する<sup>25</sup>、開催／方針（を／が）決定する、夢／目標（を／が）実現する、規模／範囲／格差（を／が）拡大する、内容（を／が）変更する<sup>26</sup>、資金（を／が）流入する<sup>27</sup>、効果／問題（を／が）発生する、効果／おいしさ（を／が）倍増する、活動／光景（を／が）展開する、形勢／関係（を／が）逆転する、～意識（を／が）

<sup>24</sup> 「一化」の造語の中に、「国交（を／が）正常化する」「計画（を／が）具体化する」「～の表面（を／が）酸化する」のように自他両用のものもあるが、「一化」は派生語なので考察対象から外す。

<sup>25</sup> 「施設／工事を完成する」は次の1例のみで、「完成する」は自動詞寄りの自他両用動詞である。

(i) (略)、一九九四年には、アクアルトラというカワウソの展示及び研究、人工増殖、環境教育を行う施設を完成している。

(ii) BがCから購入した材料を用いて工事を完成した場合、BはAに対して請負代金債権を取得することになるのですが、(略)。

<sup>26</sup> 「内容が変更する」は用例が少なく（次例参照）、「変更する」は他動詞寄りの自他両用動詞である。

(i) 法則局の番組構成の都合などにより、急きょ放送日時、内容が変更する場合があります。

<sup>27</sup> 「資金を流入する」は次の1例のみで、「流入する」は自動詞寄りの自他両用動詞である。

(i) S Bって昔・・・公的資金を流入した日本の銀行を外資に売り飛ばしたと聞いたことがあるんですが？

高揚する<sup>28</sup>、活動／機能（を／が）停止する、所有権／債権（を／が）移転する、手続き／工事（を／が）終了する、親権／資格（を／が）喪失する、権力／議論（を／が）集中する、問題／事件（を／が）解決する、問題／不足（を／が）解消する、人口／資本（を／が）増加する、理解（を／が）増進する<sup>29</sup>、～数（を／が）半減する、格差／規模（を／が）縮小する、制度／関係（を／が）復活する、関係／メンバー（を／が）固定する、動き／流れ（を／が）加速する、態度／様相（を／が）一変する、教育／技術（を／が）普及する、関係（を／が）改善する、環境負荷／コスト（を／が）低減する、外交関係（を／が）断絶する、関係／状況（を／が）継続する、ノウハウ（を／が）蓄積する<sup>30</sup>、関係（を／が）持続する、軍勢／艦隊（を／が）集結する、ミス（を／が）連発する<sup>31</sup>、雇用者数（を／が）減少する<sup>32</sup>、労働時間（を／が）短縮する、時間（を／が）超過する、事業（を／が）発展する、紛争／訴訟／聴聞（を／が）終結する、～のほう／利益（を／が）優先する、重点／焦点／生産（を／が）移行する、資金（を

<sup>28</sup> ここの「意識」は人間の意識ではなく、次の例が示すように「目的意識」「民族意識」のような抽象的概念を表すものである。

(i) これは意図的に目的意識を高揚するための言葉である。

(ii) (略)、今はイギリスの支配を打ち破って新しいインド人の国をつくろう…という民族意識が高揚しているのです。

<sup>29</sup> 「理解が増進する」は次の1例のみであり、「増進する」は他動詞寄りの自他両用動詞である。

(i) このことにより、相互理解が増進するとともに、経済面を中心とした各国や地域の結び付きの深化が世界的規模での競争の激化をもたらす一方、(略)。

<sup>30</sup> 「ノウハウを蓄積する」の用例は多数あるが、「ノウハウが蓄積する」は次の1例のみである。

(i) リスクヘッジの手法等を持ち込んだため、金融機関との交渉についてはJPMJPが主導で行ってきたが、リズム社の経理部門にノウハウが蓄積し、管理判断が十分に可能になったため、現在はリズム社側に移行されている。

<sup>31</sup> 「ミスが連発する」は次の1例のみである。

(i) しかし、この4失点の中でも、阪神は、関本などにミスが連発し、、、今年は、こんな、多いなあ。

<sup>32</sup> 「雇用者数を減少する」は次の1例のみで、「減少する」は自動詞寄りの自他両用動詞である。

(i) 雇用面への影響をみると、「雇用者数を減少した」とする企業が52.8%あり、(略)。

／が) 還流する、内容／機能／制度 (を／が) 充実する、恋／革命 (を／が) 成就する

このタイプの漢語動詞の他動詞用法について、「動作主他動詞文」と「無生物主語構文」がある。(35)は動作主が主語にくる「動作主他動詞文」である。(36)は自然現象を表し、4.2節で見たように「物理力他動詞文」と見なすことができる。(37)は「グローバリゼーション」が「貧富の格差が拡大する」原因であり、(38)は「再編成」が「人手不足が解消される」手段であり、それぞれ「原因他動詞文」「道具他動詞文」である。4.1節で見たように、「物理力他動詞文」「原因他動詞文」「道具他動詞文」は「無生物主語構文」である。

(35) だから経営者は、店を広げたり、店の数を増やしたりして、規模を拡大しようとするんだ。

(36) 毛乳頭が萎縮し、さらに活動を完全に停止したとしても、細胞としての情報をなくしたわけではありません。

(37) 例えばネオ・リベラリスト経済学者の代表とされるバグワティ (J.N.Bhagwati) によれば、(中略)、グローバリゼーションが貧富の格差を拡大しているという反グローバリストの主張は誤りである。

(38) 再編成は、人手不足を解消する唯一の手段ではない。

4.3節で見たように、ヲ格名詞が人工物や組織の場合、他動詞用法が動作主他動詞文で現れるが、その多くが「再帰的」という特徴を持っている。このタイプの自他両用動詞も同じように、他動詞用法の場合「再帰的」という特徴を持つものが多い。例えば、上記の(36)はヲ格名詞「活動」がガ格名詞「毛乳頭」の活動を指し、「再帰的」という特徴を持っている。

このタイプの漢語動詞の他動詞文には「再帰的」という特徴を持つものが多いことは次のことから確認できる。つまり、ヲ格名詞はいわゆる「相対名詞」が多いということである。影山(2011)は名詞をそれが指す物の性質によって「自律名詞」と「相対名詞」の2種類に分けられると指摘している。「自律名詞」は指す指示対象が



現実或いは架空の世界において単独で存在し、それだけで自律的な概念を表すものであり、例えば、「ネコ、瓶、雨、カップ」のような名詞が挙げられる。これに対し、「相對名詞」は、「蓋、正門、袖」のようなそれ単独では意味が不完全で、それと関連する別の概念との相対的な関係で理解しなければならない名詞である。「自律名詞」は、例えば、「これはネコです」というと、そのものが実際に「ネコ」という種類に属する限り十分に意味が通じるが、「相對名詞」は、例えば、「これは蓋です」と言われても十分に意味が理解できない。「蓋」という概念を理解するには、「やかんの蓋」のように「全体」を「～の」で明示するか、或いは全体が何であるのかが文脈から推測できることが必要であると述べている。

上記のヲ格名詞を見ると、例えば、「關係／狀況／動き／流れ／準備／態度／規模／範圍／効果／問題／様相／制度／機能／不足」などの名詞は「これは～です」と言うだけで意味が理解できず、修飾語句が付け加えられたり（「顧客との關係」）や複合語（「人間關係」「取引關係」）の形で現れるのが普通である。ヲ格名詞に「相對名詞」が多いということは、これらのヲ格名詞が何か（ガ格名詞の場合が多い）の一部であるということを示している。このように、このタイプの漢語動詞の他動詞文には「再帰的」という特徴を持つものが多いことは、ヲ格名詞に「相對名詞」が多いことから確認できる。

このタイプの漢語動詞の自動詞用法について、抽象的概念が主語に来るには4.3節で見た他動性が低い文脈が必要である。以下ではそれぞれの条件を見る。①「『テイル』形で使われ、状態の意味を表す場合」について、(39)の「機能が分散している」、(40)の「人権問題が発生している」は今の状態を指しており、「分散する」「発生する」は「テイル」形によって動作性が失われる。

(39)連邦制をとるドイツでは図4のように首都ベルリンのほか、フランクフルト、ミュンヘン、デュッセルドルフなど、多くの都市に政治・経済の機能が分散している。

(40)憲法では、(中略)、等しく基本的人権の享有を保障していま

す。しかし現実には様々な人権問題が発生しています。

②『『自然に～という結果状態になる』という文脈的意味がある場合』について、4.3 節で述べたように、そのような文脈の多くは条件節（～と、～ば）や手段、原因を表す節に導かれ、「その状況のもとで／その手段によって／それが原因で、ある結果状態が生じる」という意味を表す。(41)は条件節が前文に来ており、そういう条件があれば「景気が回復する」という事態が自然に起こるという意味を表す。(42)は「今般の十六兆に及ぶ総合経済対策」によって「景気が回復する」事態が自然に起こるという意味を表し、「手段」を表す表現を伴っている。(43)は「従業員の解雇や給与カットなど」が原因で「年金基金の規模が縮小する」という事態が起こり、「原因」を表す表現を伴っている。このように、「自然に～という結果状態になる」という文脈的意味がある場合、自動詞用法が現れることが分かる。

(41) お金を蓄えないで安心して生活できるようなシステムになれば景気が回復すると思うのですが。

(42) 何より総理は、将来にわたる経済状況を勘案して二〇〇三年としたはずであり、今般の十六兆に及ぶ総合経済対策によって景気が回復すると考えるのであれば、あえて目標年次を先延ばす必要はなかったのではありませんか。

(43) そうなると、従業員の解雇や給与カットなどの影響で、年金基金の規模が縮小することにもなりかねないことになります。

③の条件「連体修飾節内にあり背景化された出来事で使われる場合」について、例えば、次の例では「都市の機能が分散する」「改修工事が完了する」という自動詞で表される事態が連体修飾節内に現れる。(44)では都市の機能を分散させるのが国であるが、ここでは、焦点がその事態ではなく「どういう国か」ということにあるため、連体修飾節内の事態が背景化されたと考えられる。また、(45)では改修工事を終わらせる動作主（(45)では申請者）が存在するが、文の焦点が「翌年度1年分」という期間にあるため、連体修飾節内の

事態が背景化され自動詞用法が使われると考えられる。

(44) こうした一極集中を緩和するために、首都機能を移転する案を検討している国もある。一方、都市の機能が分散している国もある。

(45) 省エネ改修とバリアフリー改修の要件を満たせば（中略）、1／3の減額を受けることができます。減額される期間は改修工事が完了した翌年度1年分です。

最後に、④「動作主が不明、或いは動作主の意志を避ける場合」という条件について、(46)ではコミュニケーション技術を普及させる動作主が特定できないので自動詞用法が使われる。また、(47)では電気設備工事を行ったのはセンターの管理者であるが、ここでは、お知らせという結果状態を伝えたいため動作主の意志を前面に出す必要がなく自動詞用法が使われる。

(46) 「インターネット」という新しいコミュニケーション技術が普及し始めてから、（中略）、今やインターネットを利用したビジネスは毎年のように次々と生み出されている。

(47) センター再開のお知らせ

電気設備工事が完了しました。次のとおり再開します。

以上では、①～④という他動性の低い文脈的条件のもとで、このタイプの自他両用動詞の自動詞用法が現れることを見た。<sup>33</sup>

4.4 節をまとめると、他動詞のヲ格名詞（＝自動詞のガ格名詞）が【抽象的概念】を表す自他両用の漢語動詞は、その他動詞用法が「動作主他動詞文」か「無生物主語構文」で現れ、また、このタイプの漢語動詞の他動詞文には「再帰的」という特徴を持つものが多い。このことは、ヲ格名詞に「相対名詞」が多いことから確認で

---

<sup>33</sup> 次の例が示すように、複数の条件が働く場合もある。次の例は「ファイルやバイオレーションなど」が原因で試合が中断され②の条件を満たしており、また、その事態が「時間」の連体修飾節内にあり③の条件も満たしている。

(i) ただし、バスケットボールの場合、ファウルやバイオレーションなどによって試合が中断した時間は、タイムアウトとみなされて競技時間にふくまれないため、実際の試合時間は、これよりも長くなると考えておこう。

きる。一方、その自動詞用法は①～④という他動性の低い文脈的条件のもとで現れる。

#### 4.5 まとめ

4節の考察結果は次のようにまとめられる。

	ヲ(ガ) 格名詞	他動詞文	自動詞文	用例
A 類	【身体 の 一 部】	再帰構文／無 生物主語構文	自動詞化した 再帰構文	(他)私が意識を集中する。 ／黄色が食欲を増進する。 (自)意識が集中する。／食 欲が増進する
B 類	【自然 物】	物理力他動詞 文(無生物主語 構文の一種)	自然現象を表 す文	(他)微生物が有機物を分解 する。(自)有機物が分解す る。
C 類	【人工 物や組 織】	動作主他動詞 文	他動性が低い 文脈に現れる	(他)私がレストランを開店 する。(自)レストランが開 店する。
D 類	【抽象 的概 念】	動作主他動詞 文／無生物主 語構文	他動性が低い 文脈に現れる	(他)経営者が規模を拡大す る。／サービス貿易が規模 を拡大する。(自)規模が拡 大する。

4節で見たように、「再帰構文」「無生物主語構文」は非典型的な他動詞文である。上記の表から自他両用の漢語動詞の他動詞文はほとんど非典型的な他動詞文で使われることが分かる。一方、自動詞用法について、C類とD類は文脈的条件に依存する。このように、漢語動詞の自他両用という現象は構文や文脈によってもたらされたものであると考えられる。ABCD類のタイプはにもう一つ共通した特徴がある。つまり、他動詞文の多くが「再帰構文」か「再帰的」という特徴を持っているということである。本稿の考察を通じて再帰構文は構文レベルでの拡張が見られることが明らかとなった。

## 5. おわりに

漢語の自他両用動詞に関する研究が多いが、それらの動詞にどのようなものがありどのように使われるかが明らかにされておらず日本語教育への応用が難しい。本稿は自他両用動詞をその対応する名詞により類型化し、それぞれの類型が対応する構文の種類を明らかにした。構文レベルの分析によりどのような自他両用動詞がどういう場合に使われるかが明らかとなり、日本語教育への応用が可能となる。

### 参考文献

- 井上和子 (1995) 「他動性と使役構文」『言語変容に関する体系的  
研究及びその日本語教育への応用』平成6年度科学研究補助金  
(一般研究) 研究結果報告書 pp. 109-136
- 王淑琴 (2014) 「自他両用動詞『開く』『閉じる』について」『政  
大日本研究』11号吉田妙子教授退休記念論輯 pp. 51-70
- 王淑琴 (2015) 「和語の自他両用動詞について」『政大日本研究』  
12号 pp. 67-98
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版
- 影山太郎 (2011) 『名詞の意味と構文』大修館書店
- 金英淑 (2004) 「『VN する』の自他交替と再帰性」『日本語文法』4  
巻2号 日本文法学会 pp. 89-102
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 佐藤琢三 (2000) 『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 杉本武 (2002) 「『ている』形の解釈と動作主性について」『文藝言語  
研究・言語篇』42号 筑波大学文藝・言語学系 pp. 37-50
- 高橋太郎 (1985) 「現代日本語のヴォイスについて」『日本語学』4  
巻4号 明治書院 pp. 4-23
- 張志剛 (2010) 「語構成による漢語動詞の自他使用の予測可能性：形  
容詞性要素と動詞性要素からなる漢語動詞の場合」『言語社会』  
4号 一橋大学 pp. 415-423
- 張志剛 (2014) 『現代日本語の二字漢語動詞の自他』くろしお出版

- 張善実 (2010) 「V-N 型の漢語動詞の語構成と自他」『言葉と文化』11 号  
名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻 pp. 155-164
- 永澤済 (2007) 「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日  
本語の研究』3 巻 4 号 日本語学会 pp. 17-32
- 西村義樹 (1982) 「行為者と使役構文」『構文と事象構造』研究社  
pp. 107-203
- 仁田義雄 (1982) 「再帰動詞、再帰用法—Lexico-Syntax の姿勢から」  
『日本語教育』47 号 日本語教育学会 pp. 79-90
- 村木新次郎 (1986) 「ヴォイスの輪郭」『国文学 解釈と鑑賞』51 巻  
1 号 至文堂 pp. 64-73
- 森田良行 (2000) 「自他両用動詞から自他同形動詞へ」『早稲田日本  
語研究』8 巻 早稲田大学国語学会 pp. 74-63
- 山田勇人 (2014) 「日本語における再帰構文の他動性に関する一考察  
—自他同形漢語動詞の分析を通して—」『言語と文化』8 号 京  
都外国語大学 pp. 77-85
- 山田一美・山田勇人 (2009) 「漢語サセル動詞に関する一考察」『紀  
要』39 巻 大阪女学院大学短期大学 pp. 19-29
- 楊高郎 (2007) 「自動詞・他動詞用法に意味的制限を持つ自他両用動  
詞について—二字漢語動詞を中心に—」『筑波日本語研究』12 号  
筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学研究室  
pp. 65-88
- 楊高郎 (2009) 「国語辞典における自他認定について—自他両用の二  
字漢語動詞を中心に—」『筑波日本語研究』14 号 筑波大学大学  
院博士課程文芸・言語研究科日本語学研究室学 pp. 75-95

付記：本稿は『日語自他同形動詞的研究』（行政院国家科学委員会  
NSC102-2410-H-004-057-MY2）の研究成果の一部である。ま  
た、査読の先生方から有益なコメントをいただき、記して心  
から御礼を申し上げたい。